

# 横浜開港資料館

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

紀要 第38号  
令和4年3月

中山恒三郎家資料と地域史研究の展望

— 横浜市都筑区川和町の近現代史を中心に —

吉田 律人 1

江戸菊の近代

佐藤 大悟 18

インタビュー記録

太田宇之助父娘と中国

— 太田宇之助長女、縫田暉子氏に聞く

望月 雅士 33  
中武香奈美

インタビュー解説

太田宇之助と中国人留学生

望月 雅士 63

# 江戸菊の近代

佐藤 大悟

## はじめに

菊は皇室や日本文化の象徴として、桜と並び立つ日本の国花とも称される植物である。中国を原産とする菊は、日本に奈良時代後半から平安時代初頭にかけて渡来し、公家たちの間で親しまれた。菊を栽培・観賞する文化は徐々に庶民にも広まり、江戸時代、一八世紀に入り一挙に開花した。栽培した菊を見せ合う菊合（品評会）が盛んに開催され、古典菊が創出・改良された。一九世紀初頭の文化年間には、植木屋によって菊人形の菊細工が生み出され、菊見は明治以降にも広く人気を博した。

しかし、そうした前近代の菊の歴史に関する研究<sup>①</sup>や、菊と対比される桜の近現代史<sup>②</sup>を顧みると意外なほどに、近代日本における菊の栽培や受容の歴史学的な検討は進んでいない。植物としての菊の性質に関する植物学の研究を除くと、左記の三つの視角が存在する。

第一に、一九〜二〇世紀の園芸文化に関する平野恵氏の研究が挙げられる。平野氏は江戸時代に菊人形の創出・流行を担った江戸北郊の巣鴨・団子坂の植木屋について検討し、都市型の植木屋としての商業的な活動の様子を明らかにした。団子坂の菊見・菊人形は明治期に隆盛を誇ったが、明治末年に菊人形興行が両国国技館に移り、関東大震災を機に植木屋も大宮盆栽村に移転したことも指摘した<sup>③</sup>。二〇世紀の花卉産業に関する通史では、朝顔と菊の栽培熱の広まりや、その背景にあった洋菊の輸入への対抗意識に触れている<sup>④</sup>。

第二に、この園芸の国際性とも言うべき点については白幡洋三郎氏が光を当てている。一九世紀の欧米では、貴重な植物を集めて愛好する趣味が広まり、世界各地にプラントハンターが派遣された。中国から欧米に伝わった菊は人気を博しており、日本の開国後、プラントハンターによって日本で改良された菊の品種が収集されたことを指摘した<sup>⑤</sup>。また白幡氏は、一九〇〇年のパリ万国博覧会園芸部門に、菊が有望な輸出品で国威発揚の手段と見込まれて出品された

事例を考察した。この出品の担当者である福羽逸人は、開国時から時代が下り、日本は大菊（大輪の菊）の品種改良では凌駕されたものの、未だ大作菊（一株に多数の花をつけた菊）を仕立てる技術では勝ると認識していた。日本から持参したが枯れてしまった菊苗の代わりに、フランス産の菊苗を大作菊に育て上げ、高評価を得て「国威発揚」に貢献したと論じた<sup>6</sup>。同じくパリ万博の事例に注目した近藤三雄氏も、横浜植木の海外向けカタログに菊が掲載されていたことと言及している<sup>7</sup>。

第三に、万博のように国家における菊の存在感を示す行事として、観桜会・観菊会の背景や内容を詳細に解明した川上寿代氏の研究がある。観桜会・観菊会が条約改正交渉の側面工作として開始され、条約改正後も国際的イメージの向上手段としての役割を担い続けたと位置づけた。菊に関しては、皇居や新宿御苑で栽培された菊花が招待客である外国人の好評を得たことを紹介した<sup>8</sup>。

以上の先行研究に対して、戦前の園芸関係者による回顧を補助線として考えたい。戦前の中菊愛好家団体、秋香会の審査員中山恒三郎と副会長石川保太郎は、近代日本の菊の栽培史をこう述べる。

しかし流行を極めた菊花栽培も維新の騒乱に遭遇するに至り、一時衰廢の止むなき状態となり、暫くは僅かに一部の数奇者の手に依つて愛培されるに止まつて居たのであるが、明治の新文化建設に伴ひ再び抬頭して、漸次培菊家の数を増しつゝある処へ、明治十九年には観菊御宴の復活を見るに及び、一層栽培熟を高め二十二年には東京附近の中菊愛好家に依り秋香会が組織され、所々に開花会を催して、培菊趣味の普及

に努めると共に、菊花の改良發達を促し、中菊變態の基準を規定する等、從來になき進歩を遂げたのである。此当時関西地方は矢張り大菊の栽培に没頭し、同時に一部の数奇者間には盛んに嵯峨菊が愛好されて居たのである。

斯様な有様であつたから、明治三十年頃東京地方では中菊以外は菊花と認めない程の時代を現出し引続き四十年頃までは中菊が全盛を極めたものであるが、其頃より漸次大菊を栽培する者が現はれ、大正五六年の頃には著しく其数を増し同時に一方には小菊の懸崖作りの流行を見るやうになつて、重陽会、長生会等の大菊及小菊の愛好家により成る各団体が組織され、其後千秋会のやうな大菊栽培団体が生れるに至つた<sup>9</sup>。

この回顧は、明治維新による一時的な衰退、観菊会の開始や秋香会の設立による再興、明治後期中菊の全盛、大正期における大菊・小菊の流行という、近代日本の菊栽培の歴史を伝えている。とりわけ重要なのは、菊の品種別に作られた愛好家団体が菊の栄枯盛衰を左右していたことを示唆する点である。先行研究は巢鴨・団子坂や横浜の植木屋、新宿御苑に勤める福羽といった菊の作り手、菊を鑑賞する華族・外国人を扱う一方で、この回顧で菊の流行を担つたとされる菊の愛好家・愛好家団体を対象としておらず、対象時期も限定されている。また、「中菊以外は菊花と認めない程の時代」の一九〇〇年のパリ万博に、中菊ではなく大菊が出品されたことを考えると、菊の品種の違いにも目を向ける必要がある。

菊の品種について整理したい。菊は食用菊と鑑賞菊に分けられ、そのうち鑑賞菊は園芸学者丹羽鼎三の定義によって、花卉の大きさ

から大輪菊・中輪菊・小輪菊（大菊・中菊・小菊）と今日区分される。大輪菊は花の直径が一八センチメートル以上で、さらに厚物、管物、広物に分けられる。菊の紋章に用いられる一文字菊は広物にあたる。小輪菊は花の直径が九センチメートル未満で、小菊や魚子菊などがある。中輪菊は花の直径が九〜一八センチメートルで、今日古典菊と称される江戸菊、嵯峨菊、伊勢菊などがある。江戸菊は先の回顧における中菊を指し、中輪菊と区別するため昭和戦前期に丹羽鼎三が命名した品種である<sup>10)</sup>。「中菊の最も特徴とする処は、弁の働き即ちくるひを現はす処」にあり、「花心の周囲の弁から一枚宛立ち上つて内部に向つて倒れ、前に倒れた弁の上に順次重り、遂に花心を包蔵する様になるのであつて、此弁の動きをくるふと言ふ」ため狂菊、「花の咲き方から言へば正調を取る」として正菊とも呼ばれた<sup>11)</sup>。丹羽鼎三の定義が定着する以前の時期を対象とすることから、文中では江戸菊を中菊などと当時の呼称のまま用いる。

本稿は中菊を中心に、菊の品種別に作られた愛好家団体に注目して、近代日本における菊の栽培・受容の歴史を検討する。分析手段として、主に『日本園芸会雑誌』と『實際園芸』の記事を用いる。『日本園芸会雑誌』は一八八九年四月に刊行された日本園芸会の機関誌（月刊）で、一九〇五年から一九四四年まで『日本園芸雑誌』として継続した。『實際園芸』は誠文堂・實際園芸社が一九二六年から一九四一年にかけて刊行した月刊誌である。『日本園芸会雑誌』は明治時代に於ける同誌の花弁進展の上に齎した功績は偉大なものがあった<sup>12)</sup>。『實際園芸』は「觀賞植物を主とした栽培の實際記事を経験を基礎として載せ且つ写真に依つて各種の場合を解説するに努め」

「現に斯界を裨益しつゝあることは甚大」と評価され、近代の園芸史を通覧するのに適している。このほか、秋香会関係者が著した書籍なども用いる。ただし、秋香会の機関誌『秋香会会報』は大正末期（昭和期を除き、図書館等に所蔵されておらず確認できない<sup>13)</sup>。こうした史料の少なさは、菊の近代史に関する研究が少ない要因でもある。園芸雑誌に掲載された記事をもとに菊の近代史を跡付けることで、今後の史料発掘を俟つ基礎的研究としたい。

秋香会設立前後の園芸界における菊の位置を論ずるため、日本園芸会での菊をめぐる議論に注目する。続いて各節で、それぞれ明治・大正・昭和戦前期における中菊の流行・衰退・再再興の挫折といった流れを明らかにする。

## 一 日本園芸会と菊

日本園芸会は、一八八九年に「本邦園芸ノ振起發達ヲ図ル」<sup>14)</sup>目的で設立された、官民の園芸関係者を結集した団体である。機関誌『日本園芸会雑誌』（一九〇五年より『日本園芸雑誌』）の刊行のほか、園芸品評会や園芸情報を交換する小集会の開催によって、園芸に関する情報を交換した。初代会長は花房義賢（一八八九〜一九〇二年）、二代会長には大隈重信（一九〇二〜一九二二年）、三代会長には鍋島直映（一九二二〜一九四一年）が、明治期の副会長には田中芳男、前田正名、岩村通俊、福羽逸人、渡辺千秋、藤波言忠が就任した。この顔ぶれから分かるように、設立当時の会員には華族も多く、その他農政関係の官僚・学者や各地の植木屋らが名を連ねてい

た。一九四一年には日本園芸中央会に改組された。<sup>15)</sup>

日本園芸会の性格について、『日本園芸会雑誌』第一号冒頭に掲載された、同誌の初期の編輯兼発行者吉田進の論説「日本園芸会設立ノ主旨」を確認したい。<sup>16)</sup> 欧米文明諸国の文物を積極的に取り入れている今日の日本において、「我国ノ園芸社会」のみが立ち遅れていると吉田は述べる。その背景には、園芸を「一ノ植木業」など「職人的ノ賤業視」する認識がある。だが、園芸は「社会ノ衛生上ニ必要」な公園や道路の並木、食品としての果実・蔬菜や鑑賞品として儀礼に欠かせない花卉といった、「農業中ノ一部分」にとどまらない意義を有し、その「改良発達」が急務である。この「改良発達」において、「欧米ノ文明諸国ニ求ムヘキモノ」は勿論だが、「本邦固有ノ秀粹ニ就キ之ヲ開発スヘキモノ」を吉田は重視する。なぜなら、欧米人は優れたものをすぐに取り入れるだけでなく、取り入れて「改良発達」したものを「祖国ニ転輸シテ己ヲ益スル等ノ点ニ於テハ毫モ抜目」ないからである。

菊は、この欧米諸国による「改良発達」の一例として挙げられた。フランスに伝来した日本の「菊ノ良種」を「我国ニ於テハ不日更ニ佳良ナル種類ヲ産出セシメ復々之ヲ日本ニ伝送スルニ至ラン」と述べる仏国園芸協会総裁の演説や、イギリスの「日本菊ト題シテ已ニ数百種ヲ掲ケタル報告書」を引き合いに出す。そして、日本の植物の「改良繁殖ヲ図リ益々欧米諸国ニ輸出シ一ハ以テ我カ国力ノ一端ヲ補ヒ一ハ以テ其祖国タルノ面目ヲ保ツノ経画ナカルヘケンヤ」と述べ、それを担う組織として日本園芸会の意義を主張した。

吉田の論説をまとめると、園芸を単なる「植木業」「農業」とみ

なせず、日本の輸出振興や国威発揚の手段とするため、植木業者だけでなく華族や官僚・学者らを糾合し、園芸の「改良発達」を進める組織として日本園芸会は設立されたのだった。

同じ志向のもと、『日本園芸会雑誌』で菊を取り上げた論説として、福羽逸人「大菊栽培法に付て」がある。<sup>17)</sup> 福羽逸人は福羽美静の養子で、このとき農商務省を経て宮内省内匠寮技師として園芸に従事していた。福羽と菊の関係は深く、一八七四、五年頃から水本成美（後述）にならって中菊を栽培していた。だが一八八六年から一八八九年にかけて園芸技術の視察のため留学した際、欧米では大菊のみが流行していることを知った。帰国後に大菊栽培を志し、京都の大菊栽培家である平野屋北村久米蔵から大菊の栽培法を学び、一八九一年からは自宅で大菊の栽培を始めていた。この論説の発表後には、一八九四年から新宿御苑で大菊の栽培を始め、前述した一九〇〇年のパリ万博に際しては大菊の出品に関与し、一九〇四年からは内苑局局長として赤坂離宮御苑の菊花改良に取り組んだ。<sup>18)</sup>

福羽の論説は、日本と欧米の菊をこう比較する。日本は既に花卉一般の栽培技術では欧米に劣っているが、まだ「菊の栽培法」は勝っている。だが、「欧米人の外国産植物を移植して之を改良養成したる事実を徴して」考えれば、「本邦の菊種を海外に輸出する」望みはなくなり、日本は「菊の本場」の位置を失いかねない。「菊花の栽培法を十分研究し以て良種を作出す」必要があると述べる。この福羽の認識は吉田進の論説と共通するとともに、白幡氏が紹介する一九〇〇年のパリ万博時点での、菊の品種改良では凌駕され仕立てる技術のみ勝るとする認識に先立つものである。

そこで福羽は菊の品種に注意を促す。菊を輸出するには、欧米で流行する品種や好みに合わせなければならない。だが「東京に在りては花壇菊若くは狂菊と（い）ふものが、正菊培養家に極めて激賞せられ」る一方、欧米人が大菊を好むことを「素人好きの菊花」を愛好するのは「未だ菊花の真味を知らぬ」などと侮っている。日本でも東京の菊愛好家は中菊を好むが、一般の需用は「所謂素人好き」の大菊にあり、京阪でも大菊が好まれる。輸出して「利益を得んことを図るには、寧ろ少数の人に賞せらるゝ菊花を栽培するよりは、多数の人に賞せらるゝ即ち収利のある方の菊花を栽培する方が得策である」と、中菊ではなく大菊を栽培するよう提案する。

福羽の念頭にあったのは、中菊愛好家の団体として一八八九年に発足した秋香会の存在である。秋香会は菊の改良発達を目的に掲げながらも、「嗜好的主義、就中狂菊培養家のみ」が集まっており、大菊や小菊を軽視し栽培法を研究していないと手厳しい批判を加える。この論説は横浜植木商会で開かれた日本園芸会第三回総集会の演説をもとにしており、福羽は「嗜好的主義」で中菊中心の秋香会ではなく、好みに偏らず大菊も栽培する横浜植木商会的な「営利的の栽培」に期待を寄せていたのだった。

福羽の論説を受け、大菊栽培に同調する記事も『日本園芸会雑誌』に掲載された。青森県の園芸家小井川元吉は、福羽の論説を敷衍し、中菊と大菊、営利と嗜好のいずれかに偏らず欧米で流行している品種を育てよう主張した。ただし記事の力点は「我東北地方ハ総テノ菊種ヲ培養」しているという自身のアピールにある。<sup>19)</sup>

福羽の論説に直接影響を受けたものではないが、五年後の

一八九八年には、秋香会会長曾禰荒助の演説筆記が掲載された。ヨーロッパを歴訪して菊の人気を目の当たりにした曾禰は、これからは菊を「欧羅巴から亜米利加を経て日本に戻して貰ふやふな形になりはせぬかと心配」を抱いた。中菊中心であった秋香会も、今後大菊等を活発に取り入れて菊作りを発展させねばならない。そのためには菊の品種を問わず「多衆」に菊を見せる「大きな縦覧所」を設け、菊の人気を高めたいと述べた。<sup>20)</sup>

ただし『日本園芸会雑誌』上で菊が記事となるのは、各地の菊愛好家や菊の名所を紹介する時が主であり、菊の品種をめぐる議論は少ない。輸出や国威発揚のために大菊栽培を説く論説もなくなり、菊への言及は栽培法の紹介に限られるようになる。こうした記事の変化は、福羽が危惧した通り大菊の輸出がより困難になったことが背景にあると考えられる。更に広く捉えれば、日本園芸会の設立時であった「園芸」の「改良発達」の役割が『日本園芸雑誌』に求められなくなった結果でもあった。大正期以降、『日本園芸雑誌』は今日でいう園芸記事が中心となり、日本にとつての園芸の意味を問わなくなる。「園芸」の名のもとに官民にわたる官員を擁する必要があった創刊時から、会の性格も変化していったのである。

時代の変化とともに、菊に求められる役割も変わり、輸出や国威発揚のためにどの品種の菊を栽培するべきかは問われなくなった。そうしたなかで菊の流行を担ったのは、「嗜好的」と福羽に批判された、次節で扱う中菊の愛好家たちであった。

## 二 明治期における中菊の再興と流行

明治維新によって衰退した中菊の再興を担った人物として、福羽が中菊をならったという水本成美の名が挙げられる。水本成美は一八三一年江戸生まれ、一八六三年薩摩藩に招聘され藩律の改修に加わり、明治維新後は司法省で「新律綱領」の編纂に携わった。一八七六年に元老院議員、一八八一年に参事院議員に転じ、一八八四年に病死した<sup>(21)</sup>。律令学者として今日知られるが、樹堂と号し、当時は園芸愛好家としても著名だった人物である。依田学海は菖蒲の花を観に水本邸を訪れ、「水本氏、植物の術にくわし。家居ひろく園中植渡したるもの数しらず。牡丹・芍薬・菊の類ことに多く、世になき種を蓄たり」と誉め讃えた。菊を観に訪れた際は、水本「議官菊造ることにその妙を得て、年々作り出すもの数多なり。初の程は世にある種のみなりしが、此頃はなみくの種は皆とりすて、世になき種をのみ養ひぬ。四間の花壇・三間の花壇を庁の庭に作りて、種ならべたり。その品四十六種に及ぶ」と記している<sup>(22)</sup>。

後年の中菊愛好家たちは、水本を「江戸に於ける中菊栽培の再興」の祖とする回想を多く残している。水本邸に「維新以後世人からも忘れ去られてゐた中菊の品種が一花壇に集め植ゑられ」、水本の没後「同氏の遺種を溝口〔直正〕伯爵と私が片身として御受けして、順次他の同好者の間に拡まつてゆき、東京に於てこの中菊の栽培は年々隆盛になつて来たのである」と、水本の書生で後に秋香会審査長となった田村景福は述べる。水本のほか明治一・二年前後に

中菊を栽培していた人物・場所として、有栖川宮熾仁（元老院議長、以下当時の役職）、小田切盛徳（司法省官僚、元老院少書記官）、津田真道（元老院議員）、中山恒三郎（後述）、寺院（池上本門寺境内の永寿院、三田の済海寺、専念寺）、広尾の笑花園（植木屋）、目黒の橋和屋、池上の内田屋（料理商）の名を挙げる<sup>(23)</sup>。

こうした回想はいずれも、水本が邸宅に中菊の花壇を設け、古花の保育と新花の作出を共にを行い、品種と栽培技法を集約して弟子に伝えたと指摘する。「明治中葉に於ける中菊界の名だたる人々は殆どこの水本老の遺薫を受け」、以降の中菊愛好家は多かれ少なかれ水本の流れを汲むと自らを位置づけていた<sup>(24)</sup>。

残念ながら管見の限り、水本の個人史料は確認できない。そこで、先に中菊愛好家として挙げられた有栖川宮熾仁に注目したい。『熾仁親王行実』によれば、有栖川宮熾仁は多趣味で知られ、なかでも「心を園芸に寄せられ、独り其花を賞せらるるのみならず、その栽培に就いて、深き趣味を有」していた。巢鴨・染井の植木屋や、「菖蒲咲く頃、菊の花匂ふ時など、同好の家」を訪れ、自邸でも自ら庭師を指揮して牡丹など様々な花木を栽培した。「元老院議員水本成美は、花卉の培養を善くしければ、同人参邸の際は、桜桃梅李等に関する其説を傾聴して、時の移るを覚え給はず。かつて『審花判鳥・読律之余』てふ八大字の扁額を揮毫して賜ひしが、それは成美が法律に通ずるを以てなりき」と特筆されるように、有栖川宮熾仁と水本成美は元老院の議長と議員という関係にとどまらず、園芸趣味を同じくする間柄であった<sup>(25)</sup>。

『熾仁親王日記』<sup>(26)</sup>を見ると、水本が元老院議員に就任した



一八七六年以降、有栖川宮熾仁は菊の見頃である一月に、ほぼ毎年のように水本邸を菊の見物に訪れている。一八七六年一月一日には陸奥宗光、柳原前光、津田出、一八七九年一月八日には三条実美太政大臣と東久世通禧、大給恒、秋月種樹という元老院議員たちと連れ立って訪問した。菊以外にも、牡丹（一八七八年五月八日）、花菖蒲（一八七九年六月一七日、三条と同伴）の鑑賞に水本邸に赴いたり、逆に水本を有栖川宮邸に招いて牡丹（一八八三年五月一二日）を見せたりしていた。水本から様々な植物を貰った記録もあり、一八七六年には菖蒲六種（八月二日）、芍薬二〇株（一月五日）を譲り受けた。

他の元老院議員との植物を介した交流も盛んで、津田出邸に牡丹（一八七八年五月八日）、津田真道邸に菊（同年一月二八日）の見物に行ったり、福羽美静から洋草一株（同年五月一八日）、大久保一翁から玫瑰一鉢（一八七九年五月一三日）を貰ったりした。菊については、広尾の笑花園（一八七六年一月一日）から貰い、三条家・溝口家（一八七九年五月二九日）に譲っていたことが確認でき、記録はないが水本からも菊を貰っていたと思われる<sup>29</sup>。

以上からは、有栖川宮熾仁元老院議長のもと、主に元老院議員となった官僚・華族の間で園芸趣味が共有されていたことが分かる。その中心人物である水本は菊の他にも様々な植物を栽培し、同好の士を自邸に招き、植物を贈った。だが、一八八四年の水本の病没（五月九日に病氣見舞いをしている）以降、『熾仁親王日記』の菊に関する記事は減少し、観菊会への出席と、菊細工で知られる巢鴨の植木屋内山長太郎、親類の溝口直正邸に立ち寄る程度となった。代わつ

て自邸に育てた牡丹縦覧の記事が増加しており、水本の没後、有栖川宮熾仁の関心は菊よりも牡丹に傾いたように思われる。

水本の死去は他の中菊愛好家にも影響を与え、水本の没後には中菊が大菊と同一視されたり、菊が売買されたりと「園芸的趣味が俗に傾いて来」たという。この頃、中菊愛好家某の追善会を機に、そこに集まった面々によつて一八八九年に秋香会が設立された。池上本門寺境内の永寿院の住職永野顛山が仮会長に就いたが、会長は「社会的に力のある人」であるべきとの意見により、翌一八九〇年に衆議院書記官長の曾禰荒助が会長に就任した<sup>30</sup>。曾禰も水本の薰陶を受けており、参事院議員補時代に梅や菊を育てていたところ、同じく議員の水本から「足下の気性到底養菊に堪へず」と言われ、憤慨して菊造りにのみり込んだ。内閣記録局長時代には「同好の僚友と秋香吟社なるものを作りて頻りに菊花の培養に腐心」し、菊見の会を自邸に開いて菊と酒を楽しんだという<sup>31</sup>。その後も毛利五郎、林博太郎、芳川寛治といった華族が秋香会の会長を務めた。

残念ながらこの頃の『秋香会会報』は見られないが、一八九〇年開催の談話会の筆記『秋香会養菊談話抄』を確認したい。会の冒頭、福羽逸人は前節で紹介した持論を展開して秋香会の中菊中心の方針に疑義を呈し、「菊の種類は大中小其他嵯峨の類に至るまで一切研究して、追々と談話会を屢々開いて、諸君が得る所を述べて、互に講究したい」と提案した。対して、秋香会の仮会長を務めた永野顛山は「少し福羽さんには失礼のやうであります、小菊大菊などは、此の狂菊を造る階梯のもので、あれは私共の眼から見れば、是れは過去のもので、賞翫するに足らないと云ふ考へです」、「進歩したの

が狂菊であるのです」などと中菊の優位性への確信、大菊・小菊への軽視を隠さない。曾禰会長は両者を取りなして福羽の意見を認めながらも、この話題は後日に回され、中菊以外の菊も研究・改良・輸出すべきという福羽の提案は容れられなかった。<sup>32</sup> 福羽が批判したように、秋香会は中菊中心の「嗜好的主義」の会であり、菊の輸出を目指すような「営利的の栽培」に背を向けていた。

秋香会は毎年一月の品評会の開催、出品する菊の審査基準の統一、菊苗の分譲、『秋香会会報』の発行など多彩な活動を行った。品評会は曾禰の私邸や大蔵大臣官邸、毛利男爵邸などで開催され、その模様や順位は新聞で報道された。<sup>33</sup> 秋香会は「会員に限り、毎年観菊御宴後、日を期して拝観を許されたれば漸次会員も増加し」という。<sup>34</sup> 中菊の人気は高まり、「明治三十年頃から、中菊は名士の間に異常な流行を見るに至」ったのだ<sup>35</sup>。秋香会に入会すると、優れた菊苗や栽培の知識をもらえるだけでなく、品評会への出品や会合・観菊を通じて名士と交流できた。品評会で入賞すると新聞で報じられ、中菊を御苑に献納する光栄も得られる。秋香会以外の個人間でも、中菊の贈物を通じた関係は見られた。<sup>36</sup> こうした点は、中菊が社交の手段としても機能していたことを示す。

植物で寿命のある中菊は、育て続ける手間暇がかかる趣味である。菊の品種を保存・作出する情熱と地位を併せ持った水本成美が没した後、有栖川宮熾仁のように中菊栽培から遠ざかる者もいた。そうしたなか設立された秋香会は、水本が果たした役割を会として担うとともに、趣味に関する個人間の交流を社交に押し上げる役割をも果たした。秋香会は中菊を栽培する便宜に加え、品評会で入賞した

場合の榮譽、高貴な同好の名士たちと交流する機会を得られる場であった。それゆえに中菊は、そうした交流が可能な東京近辺、とりわけ「主なる会員が高貴の人に多いために、東京では山の手方面に発達し」て流行したと考えられる。<sup>37</sup>

### 三 大正期における大菊の流行と中菊の衰退

しかし、明治末から大正期にかけて東京でも大菊が流行し、中菊は衰退していった。

その要因の第一は、菊花大会の開催である。品評会の開催によって中菊の人気を高めた秋香会だが、一八九九年度から中菊以外の大菊・小菊も品評会の審査対象とするように決議された。一八九九年の品評会は福羽の勤める新宿御苑で開かれ、福羽の栽培する大菊や小菊が出品された。<sup>38</sup> その後について、昭和期の秋香会の理事長松濤芳俊はこう述べる。

中菊専門の人々の内にも時勢に応じて明治三十二年には大菊をぼつ／＼作り始めておたのですが、明治四十一年上野不忍池畔に開かれた菊花大会、四十二年の日比谷公園に催された全国菊花大会、四十四年の両国回向院境内に於ける全国菊花大会といふやうに、中菊の外大菊其他の綜合菊花大会が、次ぎ／＼に開かれるやうになりました。漸次大菊其他に眼を移すものが増えてまゐりました。続いて大正二年と大正四年からは引続き東京市主催の菊花大会が日比谷に開かれるやうになりました。益々一般が大菊其他に注意をするやう

になり、中菊育成者の中にも中菊趣味と大菊趣味との二つの流れが出来るやうになつたのであります。<sup>(40)</sup>

秋香会の品評会について、明治四〇年代以降には中菊以外の菊も対象に含む菊花大会が公園などで開催され、そこで大菊を見た中菊栽培家たちが大菊を作り始めたことが分かる。

このうち一九〇九年に日比谷公園で開かれた全国菊花大競技会は、東京毎日新聞社が主催、報知新聞社、日本園芸会、秋香会が協賛となり、大隈重信が会長を務めた。大隈は福羽と同様に「欧米各国の優秀品をも凌駕して精神的には大に国民の品位を高め美利的には盛んに海外輸出をも行ひ国民福併せて企図せられん事を切望」し、会長に就任したという。切花の部八二一点のうち、大菊五六六六六、中菊一二二点、広熨斗（一文字菊）四九点、伊勢菊六六、嵯峨菊三三、小菊四四四、野菊三三三と様々な品種が出品され、中でも「大菊は全出品中第一位を占め」た。<sup>(41)</sup>「大菊が東京に流行しましたのは、明治の末から大正の始めに掛けて、大隈侯の主催に依る日比谷の菊花大会が行はれた以後であります」と回想されるように、この大会は大菊の流行の引き金となった。<sup>(42)</sup>

第二に、好みの変化である。概して言えば、中菊は開花後に生ずる花弁の変化である狂いを、大菊は開花から咲き切るまでの花弁の雄弁さを観賞するという好みの違いがあった。明治期から大正期にかけての花弁について、「一目見て如何にも奇麗であるから何人の眼をもよく刺激して之を愛好せしめる」品種が人気を博する「観賞眼の変化」が指摘されている。中菊の狂いのように、その価値が「其道に携はつた者でない限りは容易に」分からない特徴より、「素人

好き」とされる大菊の雄弁さが好まれるようになったのである。<sup>(43)</sup>

第三に、中菊栽培の難しさである。秋香会副会長を務めた石川保太郎は、「中菊の花壇を作ると云ふには、都会生活の如き、小面積の地積しか持たぬ人々にとつては行ひたくも行ひ得ない方法であるし、又、費用、手間の点から云つても、それには莫大なるものを要し」たため衰退したのだと述べる。<sup>(44)</sup>その点を改善するため中菊の小鉢作りが考案されたが、それでも「綺麗に作るにはどうしても相当な熟練を要するので、中菊より容易に栽培できる「大菊のやうに大衆的とならなかつた」。<sup>(45)</sup>

第四に、ここに示された菊栽培の「大衆化」の問題がある。一九四〇年に開かれた秋香会会員の「中菊振興座談会」では、かつて中菊は「大名式の人」、「華族さんだとか富豪」といった「いゝ方が沢山作つてゐられたために大衆的に弘まらなかつた」が、「大菊の方は初めからさういふ傾向はなかつたため弘まつた、入り易かつた」と回顧された。また、「菊を作る人の階級が一般的になつて来た」、「大衆的になつて来て、一坪の土地でも作」るようになった反面、「大庭園で作る人が段々無くなつて来たために、実生する人が少くなつた」と、中菊の栽培環境も困難さを増した。「電車の車掌さんが秋香会なんかも何割か占めてゐるといふので、会の役員会へ出ても、昔の役員会と今の役員会とは品が違いますよ」、「昔は羽織袴でチャンと殿様が揃つたのですから、全然階級が変つちやつたんです」と、中菊愛好家たちの性格も「大衆化」した。<sup>(46)</sup>

秋香会が名士の邸宅で会合を開いたのに対して、明治四〇年代以降には公園等のより開かれた場所で菊花大会が開催されるようになつ

た。一定の土地と栽培技術を必要とする中菊に比べて、より狭い土地で容易に栽培できる大菊は「都会生活」や「大衆化」に適しており、中菊に代わって流行していった。また中菊愛好家たち自身の「大衆化」は、中菊が流行した要因である社交道具としての中菊の価値をも低下させたと考えられる。こうした要因から、時代が下るにつれて中菊の栽培は衰退していった。

その一方で、大菊や小菊の愛好家たちは秋香会と同様にそれぞれ愛好家団体を結成し、流行を担っていく。代表的な団体として、大菊の東京重陽会（一九一五年）、大菊の千秋会（一九一七年）、小菊の長生会（一九一七年）が設立された。<sup>(46)</sup> 活動内容は秋香会と同様で、品評会の開催や菊苗の配布、栽培方法の普及や会報の発行<sup>(47)</sup>などを行った。東京以外の各地でも、大菊を栽培していた京都の菊友会やそこから分裂した京都重陽会、大阪の秋芳会などといった菊の愛好家団体が活動していた。<sup>(48)</sup>

これらの会の設立事情については史料状況から詳しく触れられませんが、例えば東京重陽会副会長の池田喜兵衛は、秋香会に属して中菊を作っていたが「大輪菊を作る方がありません故、中菊文では物足らぬ様に思ひ」同志を糾合して重陽会を設立したと述べる。<sup>(49)</sup> 宝塚菊花協会幹事の木村太一郎は、「関東の中菊愛好家」が「関西大菊」の「進歩改良を企て」ず、中菊が衰退したことを批判した。<sup>(50)</sup> 中菊中心の秋香会の活動に刺激され、あるいはそうした秋香会への不満を抱き、中菊以外の品種の菊愛好家団体が設立されたのだった。

#### 四 昭和期における中菊の再再興の挫折

昭和期に入っても中菊栽培の衰退は止まらなかつた。昭和に改元された一九二六年創刊の園芸雑誌『實際園芸』は、ここまで参照してきたように毎年十一月頃に菊の特集号を組み、菊の愛好家団体関係者や学者らによる菊の栽培・鑑賞方法に関する記事を数多く掲載した。記事の傾向に着目すると、一九二八年の臨時増刊「菊花栽培秘訣」の執筆者は秋香会、重陽会、長生会、千秋会の順で中菊が先頭にあつたが、一九三〇年の臨時増刊「菊花栽培大観」では大菊の記事一本、小菊の記事五本に続いて、中菊の記事は二本しか掲載されていない。他の号でも同様で、執筆者も固定化しており、『實際園芸』の誌面からも中菊の衰退は明らかであった。

こうしたなか、中菊の再再興を試みた人物に、三代目中山恒三郎<sup>(51)</sup>がいる。神奈川県筑郡川和村の中山恒三郎家は酒類問屋を中心に様々な事業を手掛けた豪商で、代々菊作りに励んでいたことで知られる。先述のように明治一一・二二年頃の主な中菊栽培家に数えられるたほか、一八九一年一月二二日には有栖川宮熾仁が観覧に来るなど、<sup>(52)</sup> その菊園「松林甫」（松林圃）は菊の名所として人気を博した。「二千有種の菊花を培養し衆人の求めによりてハ快く縦覧を許せど原より益利主義ならねバ一文の茶代だも申受けず」と、お金を取らず衆庶に庭園を縦覧させ、その名望は東京にも伝わっていた。<sup>(53)</sup>

特筆すべきは、一八二九（文政一二）年に幕臣松浦某から菊苗を譲り受けて以降、中山恒三郎家が中菊栽培を世襲した点である。

一八七七年生まれの三代目中山恒三郎は、菊作りに取り組んだ理由をこう語る。二代目が一八九八年に没して「若年の余は不得止家督を相続すると共に菊の世話を継承することになった、されども若年の余には菊作りの如き隠居仕事は余り感心しなかつたが、祖父以来父も叔父も世を去る毎に「菊は作れよ、土地の繁栄になるから家業を妨げざる程度に於て作れ」とこう遺言した」。栽培方法を習っていたので、遺言に従い菊を作り「一年二年と過ぐる中に段々と面白くなつて今では友人から菊狂と云はるゝやうになつた」という<sup>34)</sup>。

秋香会設立時の名士たちは、時代が下るにつれて世を去つていった。前述のように、植物である中菊は育て続けなければ次代に引き継がない。そのため昭和期には「現在中菊の各品種を保存されてゐるのは、神奈川県の中山恒三郎氏及び東京の小原厚氏だけ」という状況に陥つていた<sup>35)</sup>。家業とともに趣味の菊栽培を世襲した中山恒三郎家は、古花の保存や新花の作出を一手に担う、中菊栽培にとつて稀有な存在となつていた。

さらに三代目中山恒三郎は、一九一五年から一九三〇年まで秋香会の副会長を務めながら、『實際園芸』などに記事を寄せて栽培方法の普及にも尽力した。先に引用した小原厚や石川保太郎ら大正・昭和期の中菊愛好家の多くは、三代目中山恒三郎から栽培技法や品種を伝えてもらい中菊の栽培を始めていた<sup>36)</sup>。弟子を育てた点でも、三代目中山恒三郎は水本成美に匹敵する人物であつた。

中菊の人気を取り戻すため、三代目中山恒三郎は中菊の小鉢作りに着手した。小鉢で栽培できれば、中菊が大菊に劣つていた「地積と、手数を多く要すると云ふ不利を除く事が出来るので、誰にでも

簡単にこの栽培に取掛る事が出来る」と期待したのである<sup>37)</sup>。しかしその取り組みが広まる前に、三代目中山恒三郎は一九三〇年に壮年にして死去してしまい、中菊の再再興は挫折に終わった。

その後の中菊について確認しよう。日中戦争勃発後の一九三八年には『實際園芸』で「事変下の菊作り」と銘打つ特集が組まれたが、中身は以前の号と変わらず、中菊の記事は載らなかつた。『實際園芸』も次第に蔬菜関係の記事が増え、一九四一年には廃刊に至つた。

一九四〇年には松濤芳俊の『中菊の作り方』が刊行された。日露戦争の最中も菊作りは盛んだつたことを引き合いに、「余裕綽々たる銃後国民の気魄がありましたればこそ、戦争に対する国民の覚悟に一層の拍車をかけたのであるともいへないことはないでせう」と、戦争中に菊を作る意義を曲がりなりにも捻りだそうとしていた<sup>38)</sup>。

本書の関連企画として開かれた「中菊振興座談会」では、出席した秋香会の一会員から、「日本の国花であり、御紋章である」菊を全国から献上し、天覧に供する「菊の国民花運動」を始めたいとの声が上がつた。もつとも、皇室の紋章である一文字菊は中菊とは形が異なり、そのためか菊を「日本の国花」とする言説は、従来の中菊関係の記事でほとんど強調されてこなかつた。この記事は、各品種で一定数が選出されるならば栽培者の少ない中菊は大菊より有利で、中菊の「新花奨励」にも役立つといった都合のいい目論見を述べた<sup>39)</sup>。輸出に過ぎず、その後「菊の国民花運動」が具体化した形跡はない。輸出や国威発揚、「営利的栽培」に背を向けた「嗜好的主義」の活動を続けてきた秋香会には、もはや中菊の再再興の試みを実現させる土壤はなかつた。

## おわりに

江戸時代に流行した菊の栽培は、明治維新による衰退を経て、二つの志向に枝分かれた。欧米を意識して宮中の観菊会が始まるとともに、輸出品や国威発揚の手段としての大菊栽培が福羽逸人によって提唱された。しかし明治時代に日本国内で流行したのは、福羽が「嗜好的主義」と批判した、愛好家たちによる中菊の栽培であった。官僚・華族らの園芸趣味の中心にあつて中菊を再興した水本成美の亡き後、一八八九年に中菊愛好家団体である秋香会が設立された。秋香会は菊苗の分譲や知識の共有といった栽培上の便宜を与え、品評会の開催等を通じて中菊趣味の社会的地位を高め、明治三〇年頃に中菊は全盛期を迎えた。だが、明治末期から大正期にかけて、公園での菊花大会をきっかけに菊栽培の「大衆化」が生じると、栽培に土地や費用が必要な中菊から、より簡易な大菊に流行が移った。設立時の名士たちが世を去るにつれて、社交道具としての魅力も衰えた中菊は衰退した。大正と昭和初期の中菊界を担った三代目中山恒三郎も壮年にして亡くなり、その中菊再興の試みも実を結ばなかった。中山恒三郎家においても戦時中に菊の栽培を止めたように、近代日本の中菊趣味は多くの品種ごとほぼ枯れ果てるに至り、現代では新宿御苑などごく限られた場所で栽培されるにとどまる。はじめにで触れたように、本稿では『秋香会会報』などの史料を確認できなかったため、園芸雑誌等の分析にとどまった。だが現在、横浜市ふるさと歴史財団によって、中山恒三郎家に保存されていた

数万点にも及ぶ史料の整理が進められている。中山恒三郎家における菊栽培に関する史料や、他に所蔵のない秋香会関係の冊子類を豊富に含むと見込まれており、本稿が辿った近代日本の菊の歴史をさらに深める稀有な史料群となりうる。中山恒三郎家文書を用いた考察については、別稿を期したい。

### [註]

- (1) 前近代における菊の栽培史については戦前来の蓄積がある。代表的な文献として、丹羽鼎三「日本栽培菊の起源に関する考説(一)(二)」(『日本園芸雑誌』第四一年第五・六号、一九二九年五月、北村四郎「菊の花の変化の歴史」(『北村四郎選集Ⅲ 植物文化史』保育社、一九八七年、初出一九六七年)、『週刊朝日百科 植物の世界Ⅷ キクの園芸品種』(朝日新聞社、一九九四年)、『伝統の古典菊』(国立歴史民俗博物館編・発行、二〇一五年)。
- (2) 代表的な研究として、斎藤正二『日本人とサクラ』(講談社、一九八〇年)、大貫恵美子『ねじ曲げられた桜』(岩波書店、二〇〇三年)、有岡利幸『桜Ⅱ』(法政大学出版社、二〇〇七年)。
- (3) 平野恵『十九世紀日本の園芸文化』(思文閣出版、二〇〇六年)第二章第三章、同「明治の菊花壇と菊人形」(前掲、『伝統の古典菊』六四～六七頁)。
- (4) 平野恵「明治・大正期の花き園芸文化」(『日本花き園芸産業史・二〇世紀』刊行会編『日本花き園芸産業史・二〇世紀』花卉園芸新聞社、二〇一九年)三三三～三三五頁。このほか平野氏は、酒井忠興伯爵邸、大隈重信伯爵邸といった華族の邸宅の温室で栽培された植物の一種に菊を挙げている(平野恵『温室』法政大学出版社、二〇一〇年、二二九～二七頁)。
- (5) 白幡洋三郎『プラントハンター』(講談社、二〇〇五年、初出一九九四年)一六七～一六九、二四六～二五四頁。

- (6) 白幡洋三郎「菊と万国博」(吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版、一九八六年)。
- (7) 近藤三雄・平野正裕『絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化』(誠文堂新光社、二〇一七年)二六～二八、二六～二七、一五〇頁、近藤三雄編著・平野正裕・松山誠・栗野隆著『百花繚乱「横浜植木物語」』(誠文堂新光社、二〇二二年)一八二～一八三頁(いずれも近藤三雄氏執筆箇所)。
- (8) 川上寿代『事典観桜会・観菊会全史』(吉川弘文館、二〇一七年)。
- (9) 『秋香会審査員中山恒三郎・秋香会副会長石川保太郎』「菊花の栽培」(『綜合園芸大系 第九篇(最新花卉園芸 三版 朝顔・菊・盆栽篇)』誠文堂、一九三三年)一五八～一五九頁。
- (10) 丹羽鼎三「科学的に観たる日本の菊」(『日本学術協会報告』第六卷、一九三二年)八三八～八四二、八五六～八七九頁、同編『原色菊花図譜』(三省堂、一九三三年)二、四、八、三二頁。
- (11) 前掲「菊花の栽培」一六四～一六五頁。
- (12) 宮沢文吾「花卉及観賞植物の発達」(日本園芸中央会編『日本園芸発達史』朝倉書店、一九四三年)三〇二頁。
- (13) 国立国会図書館と横浜開港資料館所蔵「中山浩二郎家文書」の分を合わせて、第三八～五四回(大正一五年度～昭和一六、一七年度、第三四回、第五三回を除く)の所蔵が判明している。
- (14) 「日本園芸会規則」(『日本園芸会雑誌』第八号、一八八九年一月)本会紀事一頁。
- (15) 日本園芸会については、飯島茂「日本園芸会沿革誌」(前掲、日本園芸中央会編『日本園芸発達史』七七九～八〇〇頁、前掲、近藤三雄・平野正裕『絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化』八～一三頁)。
- (16) 吉田進「日本園芸会設立ノ主旨」(『日本園芸会雑誌』第一号、一八八九年四月)一～五頁。
- (17) 福羽逸人「大菊栽培法に付て」(『日本園芸会雑誌』第三九号、一九二二年二月)二～一〇頁。
- (18) 環境省自然環境局監修・国民公園協会新宿御苑編『福羽逸人回顧録

- 【解説編】(国民公園協会新宿御苑、二〇〇六年)一三八～一五九頁。
- (19) 小井川元吉「菊花栽培家二告グ」(『日本園芸会雑誌』第四二号、一八九三年三月)一三～一六頁。
- (20) 「秋香会闘花会」(『日本園芸会雑誌』第八四号、一八九八年三月)六七～六九頁。これが実現したことは後述する。
- (21) 手塚豊「明治法制史上における水本成美」(手塚豊「手塚豊著作集 第一〇巻 明治史研究雑纂」慶應通信、一九九四年、初出一九四四年)六三～七九頁。
- (22) 学海日録研究会編『学海日録』第四卷(岩波書店、一九九二年)一八七七年六月一七日、二月三日、四三、八〇～八一頁。
- (23) 田村景福「中菊の歴史とその鑑賞法」(『實際園芸』第一五巻第八号、一九三三年一月)一八～一九頁。
- (24) 松濤芳俊「中菊の作り方」(博文館、一九四〇年)二四～二五頁。
- (25) 『熾仁親王行実』巻下(高松宮、一九二九年)四五四～四五七頁。
- (26) 本節では「熾仁親王日記」巻二～巻六(高松宮、一九三五～一九三六年)を確認の上、年月日は本文中に記し頁数は省略した。
- (27) 原文は「広尾植木舗」だが、一八七九年一月二五日の日記に「池上本門寺永寿院庭内菊縦覧、夫ヨリ広尾笑花園江立寄」とあるように広尾の笑花園と推定できる。共に田村景福が挙げる中菊を栽培していた場所である。
- (28) 田村景福が水本の遺種を共にもらったと回顧する、旧新発田藩主溝口直正と推定できる。有栖川宮熾仁の妃董子は溝口直正の父直溥の養女。
- (29) 例えば、(明治九年)六月一日付大隈重信宛水本成美書翰(早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』一〇、みすず書房、二〇一四年、五七頁)で、水本は大隈に「昨年来御約束申上候菊秧十種」を呈呈している。
- (30) 「秋香会の起源」(千葉胤一『菊花培養大観』読売新聞社、一九〇八年)一二七～一二八頁、前掲、田村景福「中菊の歴史とその鑑賞法」一八～一九頁。後者は中菊愛好家某を中川恒三郎(初代中山恒三郎か)と比定するが、その没年と異なるため別人である。

- (31) 「大庭 柯公『曾禰荒助論』(『中央公論』第二四四号、一九〇九年七月) 七八頁。
- (32) 『秋香会養菊談話抄』(山田寛之助編・発行、一九九二年) 三〇二頁。参加者は曾禰荒助会長(養菊斎主人と号している)、永野顕山、福羽逸人、田村景福、安田貞隆、小笠原長鼎、野村彭邦、山田秀俊、宮崎幸麿、竹田実行、藤沢親之、三宅誠意、山田寛之助、速記者若林珣蔵。
- (33) 一例として、『蔵相邸の秋香会』(『東京朝日新聞』一九〇一年一月一八日朝刊)。同紙での秋香会の報道は「秋香会の開花会」(『東京朝日新聞』一九二一年二月二五日朝刊)が最後で、明治期に限定される。
- (34) 市川之雄「明治大正年間に於ける菊花栽培の変遷」(『實際園芸』第三卷第五号、一九二七年一月) 四六三頁。
- (35) 前掲、松濤芳俊『中菊の作り方』二六頁。
- (36) 例えば、『読売新聞』園芸記者千葉晩香の連載「京浜園芸家歴訪録」の「実業界の大立物立川勇次郎氏を訪ふ」(『読売新聞』一九〇八年九月六日朝刊)は、京浜電気鉄道株式会社の立川勇次郎を訪ね、「記者の花友中山恒三郎氏より寄贈された」菊苗を目にしたと記す。
- (37) 福地喜一郎「大菊の分類と品位」(『實際園芸』第三卷第五号、一九二七年一月) 五二一〜五二二頁。
- (38) 「雑報」(『日本之園芸』第二二号、一九九九年一月) 五二頁、「秋香会ノ菊」(『日本園芸会雑誌』第九二号、一九〇〇年一月) 二三〜二四頁。
- (39) 前掲、『中菊の作り方』二八〜二九頁。
- (40) 「全国菊花大競技会」(『日本園芸雑誌』第二二年第一号、一九〇九年十一月) 六五頁、「全国菊花大競技会」(『日本園芸雑誌』第二二年第二号、一九〇九年十二月) 六〇〜六五頁。この会については、前掲、近藤三雄・平野正裕「絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化」一六頁。
- (41) 前掲、福地喜一郎「大菊の分類と品位」五二二頁。
- (42) 前掲、宮沢文吾「花卉及觀賞植物の発達」三〇三〜三〇四頁。
- (43) 石川保太郎「中菊の小鉢栽培法」(『實際園芸』第九卷臨時増刊号「菊花栽培大観」、一九三〇年一月) 一八三頁。
- (44) 石川保太郎「中菊の流行品種解説」(『實際園芸』第一五卷第八号、一九三三年一月) 二〇一頁。
- (45) 「中菊振興座談会 第二回」(『農業世界』第三五卷第一三三号、一九四〇年十一月) 九四〜九五頁。
- (46) 實際園芸編輯局「東京に於ける菊花団体しらべ」(『實際園芸』第三卷第五号、一九二七年一月) 五〇〇頁。
- (47) 国立国会図書館には、千秋会の会報の一部(第七〜八号、一〇号、創立十五周年記念号、一六号)のみ所蔵されている。梶山一直・福地喜一郎編『菊の菜』(東京重陽会事務所、一九二〇年)、東京重陽会編『菊の栽培十二月月』(太陽堂書店、一九二九年)、深井清徳・笠羽清吉共述『大菊の作り方』(千秋会、一九二六年)、長生会編『小菊栽培案内』(長生会、一九二二年)など、栽培方法を解説する書籍も出版された。
- (48) 奥田繁治郎「大菊を誇る京の昔と今」(『實際園芸』第一五卷第八号、一九三三年一月) 二二〜二四頁。
- (49) 池田喜兵衛「私の理想とする大菊の鑑賞法」(『實際園芸』第五卷臨時増刊「菊花栽培秘訣」、一九二八年一月) 四〇頁。
- (50) 木村太一郎「大菊の現在と其進路」(『實際園芸』同右) 九四頁。
- (51) 以下、中山恒三郎家については中山健編・公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団監修『松林市 都筑郡中山恒三郎家の記録(一)』(多賀商事、二〇一八年)。
- (52) 前掲、『熾仁親王日記』巻五、五四〇頁。前日の鹿兒島県士族今井兼角郎訪問と並び、水本没後の『熾仁親王日記』では数少ない菊に関する記述である。
- (53) 「川和の菊」(『東京朝日新聞』一八八九年二月七日朝刊)。
- (54) 松林圃主人「三代目中山恒三郎」「正菊に就いて」(『盆栽雅報』第一〇四号、一九一四年一月) 六頁。
- (55) 柳瀬静之助「中菊の品種と鉢培養手引」(『實際園芸』第一七卷第七号、一九三四年一月) 六五四頁。三代目没後であるため、この中山恒三郎は四代目または中山家全体を指す。
- (56) 前掲、石川保太郎「中菊の流行品種解説」二〇六頁、小原厚「中菊



- の作り方」〔實際園芸〕第三卷第五号、一九三七年二月）六三九頁。
- (57) 前掲、石川保太郎「中菊の小鉢栽培法」一八三～一八四頁。
- (58) 前掲、松濤芳俊『中菊の作り方』六頁。
- (59) 前掲、「中菊振興座談会 第二回」一〇〇～一〇一頁。なお一九四〇年には、日本の桜に対して杏を満洲国の国民花とする「杏国民花運動」なるものが提唱されており、それを念頭に置いた可能性がある（高媛「帝国の風景」、『*Journal of Global Media Studies*』第一一号、二〇二二年二月、二〇頁）。
- (60) 前掲、『松林甫』一三頁。

〔付記〕

本稿は横浜開港資料館・横浜都市発展記念館共同研究事業「中山恒三郎研究会」の成果の一部である。

**横浜開港資料館紀要**  
第三八号

令和四年三月三十一日発行

編集——横浜開港資料館

〒231-0021

横浜市中区日本大通3

TEL045(201)2100

発行——公益財団法人

横浜市ふるさと歴史財団

印刷——株式会社佐藤印刷所